



豚

学び
ナビ

想像・イメージ

言葉のもつイメージの変化

私たちが詩を読むときには、その詩に描かれた言葉から想像力をはたらかせ、日常の経験の中で見聞きしたことのある見慣れた事物と結びつけて、イメージを心に思い浮かべます。

しかし、詩の言葉は、行や連の展開につれ、そうした見慣れたイメージを少しずつ変化させていき、読者の中のイメージを新たに創り出していきます。

その結果、例えば『豚』では、題名の「豚」を読んだ時と、最終連の「豚」の様子を読んだ時とは、「豚」のイメージは大きく変化していくこととなります。

類比・対比

この詩の場合、こうした変化をもたらしているのは、連の構成や展開の方法です。例えばこの詩では、最終連を除き、偶数連には「豚」とだけ記されて繰り返し返されています。たった一文字を繰り返し返すだけに、読み進めていくと「豚」という言葉のイメージが、読者の中でさまざまに変化していきます。

目標

- 言葉のもつ意味やイメージに注意して読む。
- 言葉のもつイメージが詩の中でどう変化するかを考える。

類比

同じ種類の言葉や、ものを重ねて比べる。

豚↓豚↓

対比

言葉や、ものの異なる面を比べる。

ハム、ソーセージ……



背ロース、肩ロース……

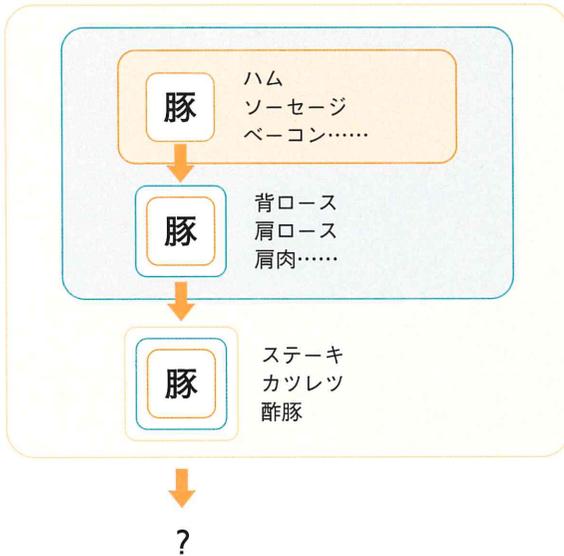
10

5

また、そのような変化を支えているのが奇数連です。奇数連では「豚」をさまざまな面から捉えることで、生き物としての「豚」と、食べ物としての「豚」とを鮮やかに比較しています。

このように、イメージの変化を生み出すために、同じ種類の言葉やものを重ねて比べていくような方法を**類比**といい、異なる面を比べていくような方法を**対比**といいます。

詩の言葉のイメージの変化を捉えるには、類比や対比という表現方法にも注目して、想像力をはたらかせていくことが大切です。



ヒント

- 第一連に書かれている「ハム、ソーセージ／ベーコン／焼き豚」は、「豚」を「食べ物」という点から見ているが、第三連は「豚」をどういう点から見ているか、考えてみよう。
- 同様に、第五連、第七連は「豚」をどういう点から見ているか、考えてみよう。

↓ P 247 みちしるべ 2



豚

木坂涼きさかりょう

ハム、ソーセージ

ベーコン

焼き豚

豚

背ロース、肩ロース

肩肉、ばら肉、もも肉、すね肉

ヒレ

豚

ステーキ

カツレツ

10

5

酢豚

豚

骨、頭、皮、耳、鼻、しっぽ

ひづめ、血液

スープ、ラード

泥に背中をこすりつけるのが目を細めるとき

でした

子だくさん

でした

千 みちしるべ

① 奇数連で示される内容は、豚のどのような面を捉えているか、整理しよう。

② 偶数連の「豚」という言葉のイメージは、読み進めていくにつれて、どのように変化していくか、考えよう。

③ この詩は「豚」という題材をさまざまに描くことで、どのようなことを訴えかけているだろうか。自分の考えをまとめ、クラスで交流しよう。

10

5



木坂涼

〔一九五八〕

埼玉県に生まれた。

詩人。児童文学作家。

詩集に『どこへ』などがある。絵本の執筆や翻訳も多数手がけている。

《出典》『現代詩文庫150 木坂涼詩集』によった。